

## ■ 亜麻会社、工場の歴史

| 年 代         | 歴 史                                                              |
|-------------|------------------------------------------------------------------|
| 明治 七年(一八七四) | 開拓使長官黒田清隆が、官園で亜麻の試験栽培。                                           |
| 一七年(一八八四)   | 滋賀県大津市に日本最初の亜麻関係会社の近江麻糸紡織(帝国繊維の前身)が設立された。                        |
| 二〇年(一八八七)   | 札幌に北海道製麻会社設立。                                                    |
| 二一年(一八八八)   | 栃木県に下野麻紡織会社設立。                                                   |
| 二五年(一八九二)   | 帯広の晩成社が亜麻栽培の試作を行う。                                               |
| 二九年(一八九六)   | 帯広の晩成社が亜麻繊維の加工を手がける。大阪市に日本織糸会社設立。                                |
| 三六年(一九〇三)   | 近江、下野、織糸が合併して日本製麻に。国産初の消防用麻ホースの製造開始。                             |
| 三九年(一九〇六)   | 北海道製麻の猿別(現幕別)工場操業。十勝最初の亜麻工場となる。                                  |
| 四〇年(一九〇七)   | 日本製麻と北海道製麻が合併して帝国製麻に。                                            |
| 大正 九年(一九二〇) | 北海道亜麻工業の新得、風連、小清水製線所操業。                                          |
| 一〇年(一九二一)   | 道内の亜麻工場数八五工場に。                                                   |
| 昭和 五年(一九三〇) | 北海道亜麻工業は帝国製麻に吸収合併される。                                            |
| 一六年(一九四一)   | 帝国製麻は太陽レーヨンと合併して帝国繊維に。十勝の帝国繊維の工場は新得、芽室、帯広、音更、大樹、池田、止若、幕別、本別。     |
| 二五年(一九五〇)   | 帝国繊維は「過度経済力集中排除法」により帝国製麻、中央繊維、東邦レーヨンに分割される。帝国製麻の十勝の工場は、新得、大樹となる。 |
| 三〇年(一九五五)   | 帝国製麻は中央繊維に移管され、中央繊維新得工場に。                                        |
| 三一年(一九五六)   | 新得工場閉鎖。三六年の歴史を閉じる。工場跡地にモータースクール等がある。                             |
| 三四年(一九五九)   | 帝国製麻と中央繊維が合併して帝国繊維に。                                             |
| 三八年(一九六三)   | 帝国繊維帯広工場閉鎖。工場跡地に帯広市役所、問屋街等がある。                                   |
| 四五年(一九七〇)   | 全国最後の亜麻工場、帝国繊維音更工場閉鎖。                                            |
|             | 亜麻産業は八十三年の歴史を閉じる。                                                |

## ■ 帝国製麻新得亜麻工場(昭和二十五年頃)

新得亜麻工場は、大正九年に北海道亜麻工業会社が道内三ヶ所に設けた製線所の一つとして操業を開始した。工場敷地は、当時の屈足村字新得基線六十一、六十三、六十五番地の十二町歩で、この用地は新得町開拓者の村山和十郎経営の農場跡地であった。

昭和五年に北海道亜麻工業は帝国製麻に吸収合併され、新得製線所は帝国製麻新得亜麻工場となった。その後、帝国製麻は太陽レーヨンと合併し、帝国繊維となり、十勝の亜麻工場全部が帝国繊維傘下となった。二十五年、帝国繊維は帝国製麻と中央繊維に分割され、新得は再び帝国製麻新得亜麻

工場となった。

三十年に帝国製麻は中央繊維に移管され、新得は中央繊維の工場となった。移管に伴い他の帝国製麻へ、中央繊維からの転勤があった。しかし、この工場は翌三十一年、原料の減少でわずか一年で閉鎖された。

亜麻茎を繊維にする工場は製線工場といわれていて、新得は創業当時は製線所(工場)であったが、その後は亜麻工場を工場名としていた。

二十五年頃の帝国製麻新得亜麻工場長は中津川晴元(元助役広瀬隆之夫人和子さんの父)で、若く温厚な中津川工場長は移管時まで在職。閉鎖時の中央繊維新得工場長は加来義雄。

帝国製麻新得亜麻工場



## 工場敷地内略図

「別記」

## 亜麻の栽培等

亜麻栽培は北海道が最適地とされ、二十五年の道内作付面積は一八、〇〇〇畝、町内は二二〇畝であった。戦前十年代頃の作付けは四〇、〇〇〇畝で、その頃の道内亜麻工場は八十五を数え、十勝も多いときは八市町に十三工場あった。

冬期間に亜麻種子の選別が行われる。亜麻の種子はえんじ色で“蚤”くらいの大きさで、五月に入って播種されていた。撒き方はバラ撒きで、成長時には中が空洞の二mmくらいの茎になるため、均一に撒かないと連鎖倒伏して収穫時に苦労することになる。

亜麻は連作を嫌い五年くらいの輪作が良いとされていた。当時の農家は馬で畑を耕していたため耕地面積が狭く、このため実際に輪作をしていたかどうかは分からない。さらに収穫までの手間の多い亜麻栽培には苦労されていたようである。ただ亜麻は農家の換金作物であり、お盆頃頃その年最初の現金収入として生活を支えたといわれている。

## 亜麻引き(抜き)

八月に入ると亜麻の収穫時期になり、手作業の亜麻引きがはじまる。少しでも長い繊維を取るため根元から抜いていたが、茎丈一〇〇cmくらいの亜麻を中腰で抜き、足下で根の土を払うキツイ作業であったらしい。

亜麻引きは、亜麻工場に雇われた出面取り(バイト)がトラックに乗せられて農家へ出向いていた。一日に数カ所の農家を廻っていたが、バイト要員の中には街から夏休み中の中学生も雇われていた。

## 亜麻の買茎

買茎(ばいけい)とは、会社用語で亜麻を買い付けることをいう。

収穫された亜麻は工場の担当者によって五段階の等級が決められ、その場で買い付けが行われたが、

天候によって品質が大きく変わる亜麻に農家は一喜一憂させられた。

買茎された亜麻は直径五十cmくらいの束にして二カ所に縄を掛け工場に運び込まれた。工場への搬入は、当時町内ではまだ珍しかった貨物トラック(現在の四ツ積みくらい)が使われた。当時の写真によると、トラックの荷台は木枠を組んで広くし、買茎した亜麻を車高の倍の高さに積載して工場に運んでいた。運び込まれた亜麻は五つの倉庫に順次保管され、入りきらない亜麻は工場敷地内に野積みになされ、工場内に収容しきれないものは農家に一時野積みになされた。

## 工場外の作業

最初の工程は、亜麻を温水槽で浸すために根元を二〇cmくらいの束にして縄で“結束”する作業。結束された亜麻は、幅三呎、長さ八呎、深さ二呎くらいのプール状の温水槽へ縦にして並べて入れ、温水槽に蓋をして、この状態を数日間。この工程を“浸水”という。浸水数日間で茎のベクチンを分解、繊維を分離させるが、浸水加減が難しく、この作業は経験豊富な役職者が担当していた。

また、浸水は水質にも影響を受け、良質な水が得られず閉鎖に迫り込まれた工場もあった。ただ、亜麻事業の初期は池とかどぶに浸していたという記録もあるが、新得工場は北新得十四区からの沢水を導水していた。温水槽から出された亜麻は乾燥現場に運ばれ、根の部分を上に島立てて数日間天日干しされる。一定の乾燥をさせた上で一旦倉庫に保管される。

## 工場内の作業

乾燥後の亜麻は日産分だけ工場に運ばれる。工場内最初の工程は亜麻を砕茎する作業で、ローラ状の機械で亜麻の茎をつぶして柔らかくしていく。次いで粗線ムーランに掛けられる。ここで繊維と茎が完全に分離され、繊維だけが取り出される。さらに細かい茎を取り除くために正線ムーランに掛ける。

ムーランとは、羽根が一〇枚くらいの風車状のもので、回転している羽根に亜麻を当てて茎の部分を飛ばして繊維だけを残す木製の機械のこと。汽缶室のボイラーからの蒸気を動力としてムーランを回転させていた。

この工程に携わる従業員は職工さんと呼ばれ、正線は熟練工が担当していた。ただ、回転するムーランに手などを巻き込まれる事故も起きていた。

正線された亜麻繊維は仕上室で“延線”作業が行われ、繊維を平行にし質量を一定にした。延線後は木枠のプレス機に掛けられ、約五〇角×一〇〇cmくらいの角梱包にされる。角梱包が一定量に達したらトラックで駅に運ばれ、岐阜県大垣市の帝國製麻大垣工場などへ送られていた。

新得など原料工場から送られた亜麻繊維は大垣工場などにおいて商品化された。

## 亜麻繊維の用途

亜麻の生地は、業務用では消防用ホース、鉄道貨車用幌、郵便用郵袋、米袋、畳糸など。船舶用にハンモック、艀口覆、漁網など。家庭用では布地、蚊帳などに使われ、救護用テントは関東大震災の復興事業に役立てられた。

亜麻は、戦前、戦時中は軍隊の兵器覆、天幕、飛行機翼覆など広範囲に使われていたが、戦後、軍需を失った亜麻繊維は生活用、産業用需要で利用拡大を図り、軽く肌触りのよい亜麻は服地、シャツ、ナプキン、タオル、

ハンカチなどに最適品だった。さらに耐水性があり丈夫な亜麻は戦後も消防用ホース、自動車用幌、天幕など産業用に受注された。特に消防用ホースは戦前戦後を通じてシェアは百%であった。しかし昭和四十年頃から合成繊維であるナイロン、ビニロンなどの急速な発展、普及とともに亜麻需要は一気に衰退し、四十五年に音更亜麻工場の閉鎖をもって道内の亜麻の歴史は終わった。

### 昭和十年頃の亜麻繊維広告チラシ

「資料参照」

### 昭和三十年の工場移管に伴う挨拶文

\*原文のまま

#### 御挨拶

当社事業に就ては毎々特別の御支援を賜り厚く御礼申し上げます。顧れば北海道に亜麻事業を創始されて以来事業の変遷と共に会社間にも幾多の離合集散が繰り返されて遂に戦時統制下本道の亜麻事業は帝国繊維株式会社一本に統合し強力なる亜麻増産体制が整備され各位の絶大なる御協力の下に亜麻事業を通じて北海道寒地農業確立の為微力を尽くして参った所でありましたが偶々終戦後連合軍の指示に従い会社分割の止むなきに立到り帝国繊維の亜麻事業は当中央繊維株式会社と帝国繊維株式会社の二社に分割せられ昭和二十五年七月一日より夫々の指示された亜麻工場を所管して亜麻事業の運営に当って今日に至ったのであります。今般会社事業運営の合理化上両会社間に於て協議の結果一部亜麻工場の再編成を行い帝国製麻新得亜麻工場の一切の事業を当社が継承して本三十三年度より経営する事に相成りました。中央繊維と云い帝国製麻と云いまして元々同一会社であつた關係上経営上の大綱に於ては何等変わる所がありませんから今迄帝国製麻に与えられたる御後援を引續いて当中央繊維にも御与え下され新得亜麻工場の発展に就て格段の御支援を懇願申上ぐる次第であります。

昭和三十年四月 日

中央繊維株式会社

#### 従業員社宅（長屋）

工場創業時の大正九年築の長屋の内三棟は便所、流しが別棟で、五戸の共同使用になっていた。また、暖房や煮炊きは亜麻クズを燃やして行っていたが、亜麻クズは、ムーランで飛ばされた亜麻の茎で、それなりに火力があつた。ストーブは直径五〇cmくらいの寸胴で、亜麻クズ専用の作りであつた。亜麻クズは工場の配給で、長屋の物置には亜麻クズを保管する場所が確保されていた。戸数は三十四戸あり、ほとんどが共稼ぎで、休憩所には保母役もいたし、二十年頃の長屋には中学生以下の児童幼児が八十名近くいた。

工場としては、当時の町内では一番大きく、長屋に入居できない工員の多くは街から通勤していた。

#### 浸水後の廃水

亜麻には色素があり、黄色っぽい汚水は廃水路に流されて、汚水はそのままなら処理されないまま佐幌川に流されていた。市街地の佐幌川には川泳ぎに最適な場所があちこちにあつて、夏休みなどは多くの子どもたちが川遊びに興じていた。工場はそういうところの上流にあり、汚水は下に流れて子どもの遊び場を直撃していた。当時は、そのことになんら抗議することもなく、決まった時間に流れてくる亜麻の汚水を避けて泳ぎを中断していた、という話を聞いた。“公害”という言葉も認識もない、今では考えられない古き良き？時代だった。

#### 亜麻立て

浸水を終えた亜麻は乾燥現場に運ばれ島立てによる“亜麻立て”が行われた。広い現場に島立てが整然と立ち並ぶ風景は亜麻工場の原風景である。乾燥後のなにもない現場は春だとタンポポ、夏はクロイバの花が一面満開になつて咲いていた。ただ、亜麻立ての現場は昔の佐幌川の河川敷跡で、佐幌川とほぼ高低差のない平地になつていて、大雨の護岸のない佐幌川はすぐ氾濫し、乾燥現場に立ててあつた亜麻が濁流にのまれて全部流される被害が度々あつた。

## 亜麻製品の服装

### 経済的な大衆の衣料

……洗濯に強く光澤も優雅……

麻は五十年の昔から紡績原料として布を織るのに使用されて居りました。

エジプトのミイラを巻いた布も麻の一種で亜麻です。東洋でも朝鮮の人達が昔から一年中麻の衣料を使用してきたし、また日本も天保の昔から一般の人達の衣料が夏冬通して麻を使用していたことも他の繊維とちがつて長い繊維の壁で織るので織物にするのに大變らくであつたと思われまが、それよりも麻布のもつ強さと汚れが落ち易いと言う経済的でしかも衛生的である点から大衆の衣料として賞用されたものと思われまが。

そこで高度な文化生活をしている私達も、過去のそうした事實を更により深く考えなおす必要があるのではないのでしょうか。

亜麻は世界産額の八〇％はソ連でフランス、オランダ、ベルギーなどにも産出し、世界最優良品としてスコットランドのリネンが最も有名です。日本のようにせまい土地ではスコットランド以上に優良な亜麻の生産を考えねばならないと思います。それには、亜麻か一口に言わないでリネンの特徴、つまり洗濯に強く汚れも落ちやすい、すつさとした清楚な衣料としてもなんともいふ肌ざわり、いつまでも保つ優雅な光澤は世界の人々、とくに米国の人は年中衣料に食卓に部屋にあらゆる生活面に愛用しています。それも経済的で衛生的にも文化生活の必需品として賞用されるわけですから。

冬の長い寒い国ソ連でも世界産額の八〇％もある亜麻を肌着とし、また建築材料として生産の大部分を国内消費しているのも国内の産業奨励と国内の増進をはかつているのです。

今夏市内ではリネンによる夏のセビロー揃四千山前後で市販されています。決して亜麻製品が高価で一般生活に使用できないと云うことはないと思います。そこで日本中全体で亜麻にたいする理解を深め北海道の亜麻を育てることを考えるならば、増産は勿論、品質もより改良され国内需要はより安価に満たされ、しかも現在より以上に貿易品として世界の人々から歓迎されることになりましょう。

#### ◎ 営 社 亜 麻 製 品

|                  |                                                                                            |
|------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 織物<br>(フジヤ印)     | 各種服地・芯地・シャツ地・ナブキン・タープクロース<br>タオアル・ハンカチーフ・シーツ・画用カンバス・蚊帳<br>加工用リネン生地・帆布(鉄道シート、通信行囊、船舶<br>用)等 |
| 布ホース<br>(金網印及露印) | 消防用・船舶用・鉱山用等                                                                               |
| 麻糸<br>(白之出印)     | 巻糸・帆縫糸・針布用糸・漁網糸・総経用通じ糸<br>括糸・蚊帳糸・縫物用原糸・車ミシン糸等                                              |
| 混紡製品<br>(露印)     | 芯地・蚊帳糸等                                                                                    |

中央纖維株式会社  
帯廣亜麻工場



亜麻播種機は亜麻種や稲きびなどの種に使われた。



亜麻製の消防用ホースは特に凍結時に効果發揮した。

「亜麻播種機」

「消防用ホース」

七三八号

三二二二

収蔵番号

新内郷土史料収蔵庫

「別 記」

昭和25年頃の 新 得 亜 麻 工 場 敷 地 内 略 図

